担い手向け

TAC通信表彰

新潟県　JA新潟みらい

タイムリーな営農情報が届くように月1回の発行。TACの訪問地区と訪問時期に応じて内容を変えることで、その地区の作物の生育状況、作業時期に合った情報になるように工夫している。

京都府　JA京都中央

病害虫の発生状況、作物の生育状況に加え、「TAC information」のコーナーを設けて毎週発行し、400号を突破した。支店窓口やJAホームページでの掲示、FAXなど配布方法も多様。

兵庫県　JAたじま

お知らせ、GAP情報、農機具関連の3部構成。毎月のタイムリーなお知らせは、TAC全員の訪問活動の話題になるように工夫する。消費者やバイヤーの声、GAP情報の連載企画も掲載。

島根県　JAしまね

県単一JAの特徴を活かし①本店情報②地区本部の担い手への提案や解決事例③厚生連発信の健康情報――を1冊にして配布。他部門・関係機関と内容を検討し部門間連携にもつなげている。

JA表彰

①若手農業者や農業法人など担い手への提案内容とその成果
②TAC活動のJA事業への貢献
――が優れた4JAを表彰しました（最優秀が全農会長賞）。

JA表彰　全農会長賞　滋賀県　JA北びわこ

担い手の要望に応えるため「農家組合員の所得増大と農業生産拡大」プロジェクトを実施。水田輪作が中心の担い手に対して、大麦＋主食用水稲の二毛作で収量改善・コスト低減策を提案した他、加工・業務用キャベツや全農式トロ箱養液栽培システム「うぃずOne」の導入による複合経営など所得向上策を紹介し、普及拡大を図った。小麦から大麦への全面転換を推し進めるために管内に実需者の工場を誘致し生産と販売の安定化につなげた。さらにTACが中心となって労働力支援や農業融資、農機具リース応援事業、農業リスク診断など、総合的な支援を行っている。

JA表彰　北海道　JAあさひかわ

酒造好適米の作付面積の拡大と他産地との差別化・販売力強化のため、ASIAGAPの団体認証取得を支援し、地域のブランド化に大きく寄与した。黒大豆では、営農指導や色彩選別機導入による品質の安定、契約販売による価格の長期安定化を図るなど、「黒い恋人」ブランドの維持・強化により、担い手が安心して生産できる体制を確立している。農業高校と共同開発した黒大豆味噌、「黒大豆デニッシュ」など新たな商品化も推進。豪雨災害では、TACがいち早く情報収集し支援の先頭に立った。行政や自動車メーカーと連携し稲作でIT管理ツールの導入も進めている。

JA表彰　石川県　JA小松市

園芸作物の導入を望む、水稲主体の農業者に加工用トマトの露地栽培を提案。栽培管理・施肥防除体系を確立し、全面的な生産支援や機械化による作業労力の軽減、収支シミュレーションの提示による作付け誘導を図るなど、新たな産地形成に取り組んだ。地域住民とも取り組みを共有するため、担い手と協力して収穫体験やケチャップづくり講習会を開催。援農隊による労働力支援では、無料職業紹介所の立ち上げ、ちらしによる求人・求職者の募集、TACの声掛けなどによる労働力のマッチングを実現。事業承継支援でも高齢農家に働きかけ若手後継者への承継を行った。

JA表彰　滋賀県　JAおうみ冨士

農業者間の連携と地域農業の発展のため、TACが次世代を担う若手農業者に呼びかけて「絆の会」を設立。農業機械の一括購入による資材コストの低減や銀座三越「みのりみのるマルシェ」等での農産物の販売促進などに取り組んでいる。土地利用型農家には「丹波大納言小豆」や「もち麦」の導入を提案し、実需者ニーズに基づく生産で所得増大を目指す。特にもち麦は消費者が購入しやすいよう専用施設を設置し精麦での販売を図った。水田での露地野菜栽培では、地下水位制御システム「FOEAS」で排水性の改善や収穫量の増加、灌水作業の労力軽減を図っている。

JA特別表彰〈事業承継部門〉

率先して事業承継に取り組み、
「事業承継ブック」の活用や、部門間連携の実践など
優れた活動を行うJAを表彰しました。

JA特別表彰（事業承継部門）　石川県　JA金沢市

JA内に「事業承継連携協議会」を立ち上げ、目標や情報の共有化、各部署の専門分野や役割の明確化など、連携体制を構築した。担い手には「親と子の経営内容報告会」として、親子間の話し合いや理解を促す場を設け、事業承継に関心のある親子には「事業承継ブック」を使った支援を行った。高齢の親から子への継承に加え、孫も就農したいという3世代に渡る事例では、話合いの場の提供、経営改善提案、孫の技術習得支援などを行い、孫の代まで営農を継続できる見通しを立てた。また、親元就農者にはJA独自の補助事業を拡充して支援し、担い手の満足度も高い。

TAC表彰 受賞者

若手農業者や農業法人など担い手への提案内容に新規性、
創造性があり、その成果の優れたTACを表彰しました。

北海道　JAあさひかわ　村上 達也氏

地域農業の
課題解決に向けた
総合支援

「江丹別蕎麦」ブランドの維持向上に向け、ソバの品質・収量向上の生産支援を実施。契約販売や製品パッケージの変更、雪蔵熟成による新たな付加価値の創出など販売を強化し、担い手の所得増大や生産意欲の向上を図った。その結果、全国それぞれ優良生産者表彰事業で江丹別蕎麦部会が最高賞を受賞、産地の評価向上につなげた。

秋田県　JAあきた北　本多 孝平氏

地域農業の活性化に
向けた法人設立と
法人間の連携による
枝豆品種リレー

法人設立や園芸品目の導入、施設の有効活用など、担い手の要望に基づき提案活動に取り組んだ。その結果、地域ぐるみ型の農事組合法人設立、ネットワーク型園芸拠点整備事業の利用や同地区の4法人が連携した重点品目「枝豆」の産地拡大、JA施設を活用した飼料用米の直播栽培導入が実現、担い手から信頼と評価を得ている。

茨城県　JA新ひたち野　保田 昌宏氏

地域団体から
個別低利用者までの
幅の広い訪問活動

JA未利用・低利用の担い手への営農研修会の開催、外国出身の新規就農者への収益性を考慮した作物の作付け提案と栽培支援、大規模経営体に対するGAP認証取得への支援など、多岐にわたる活動を行う。担い手の経営課題の改善に加え、JAとの関係構築にも貢献。今後も継続した支援を求められ、将来的な事業拡大が期待される。

新潟県　JA越後中央　川本 花子氏

地域の代表格の法人における
「高生産性水田輪作」の
取り組みとその後の
地域農業への水平展開について

水稲主体の担い手に対して、FOEAS施工圃場での新規輪作体系や、高密度播種・多収性品種への流し込み施肥の導入、ICT技術による農地情報や作業履歴の効率的な管理など、先端的な提案で経営改善に取り組んだ。機械化一貫体系のタマネギや、施設園芸の導入による複合経営は、若手農業者の意欲向上にもつながっている。

石川県　JA金沢市　押田 哲男氏

次世代を担う
農業者との
関係強化

若手女性農業者へのヘタ葉ナス や金沢柚子の生産・販売戦略の提案、部門間連携による担い手の節税への取り組み支援、加賀野菜をはじめとする地域ブランドの維持・発展の支援などに取り組んだ。担い手の販売実績の拡大など経営改善に貢献、若手農業者や異業種、新規就農者といった地域の次世代農業者とのつながりも強化した。

滋賀県　JAグリーン近江　岩穴口 博美氏

集落営農法人がつくる
女性コミュニティの形成
～切り花栽培への挑戦と継続
取組のための経営改善～

女性を中心とした農業振興の相談を受け、切り花ストックの栽培を提案。ハウス内での暑さ対策や新たな作業体制を紹介して、品質向上と作業の効率化を図り、製品率の向上と労働時間の削減につなげた。女性の新たなワークスタイルの形成や地域内のコミュニティの場を構築し、担い手の経営改善とともに地域活性化にも貢献した。

島根県　JAしまね　石川 敏子氏

これからの
集落営農は、
米を買う!?

担い手の経営課題に、JA・関係機関の他、経営コンサルタント、税理士など専門家を加えたチームを立ち上げ、経営コンサルを実施。水稲から畜産への経営シフトや農業ICT活用の提案、Iターン新規就農者への支援など、JAの総合力と部門連携機能を最大限に発揮し、担い手の経営改善および担い手との関係強化につなげた。

福岡県　JAふくおか八女　橋本 篤児氏

様々な担い手
経営体とJAをつなぐ
TAC支援

生産部会の未加入者に法人設立支援や土壌診断、遊休ハウス活用を提案。レタス法人にはJA独自事業活用による圃場集積や育苗ハウス移設による単収向上対策を支援した。地域の茶業振興に向け、碾茶の新規栽培や加工場の新設支援も実施。所得向上や作業の効率化に加え、担い手との新たな関係構築とJA事業の拡大に寄与した。

TAC®

TAC（タック）とは、『地域農業の担い手に出向くJA担当者』の全国統一愛称です。

TACの役割や活動状況については、TACのホームページをご覧ください。TACのLINEスタンプもできました。若手農業者とTACのコミュニケーションツールとしてお使い下さい。

TACのホームページ

TACのLINEスタンプ

JAグループ

TACパワーアップ大会 2018

TAC活動の拡大を呼びかけたJA全青協の水野会長

担い手に出向く活動を評価する農水省経営局の上田参事官

農業の最前線でのTACの活躍に期待する全農の長澤会長

基調講演した岡田武史氏

大会宣言を読み上げる新潟県JA越後中央の川本花子さん

全農会長賞を受賞し事例発表するJA北びわこの丸岡重幸課長

全農会長賞の表彰を受ける滋賀県JA北びわこの田中洋輝理事長

約600人が集まったTACパワーアップ大会2018

日、「TACパワーアップ大会2018」を横浜市で開催しました。地域農業の担い手に出向くJA担当者（愛称TAC＝タック）の全国大会として開かれ、約600人が参加。11回目を迎える今年は次の10年へ新たな一歩を踏み出す大会と位置づけて、全国の事例を共有しTAC活動の強化を誓いました。

優れた活動を行うJAやTACの表彰と事例発表を行った他、基調講演や大会宣言の採択、TACの新規設置や事業承継支援など6つのテーマで分科会も実施しました。

大会あいさつで全農の長澤豊会長はTACについて「JAグループ経済事業の最前線で日々、活躍している」と評価。その上で、労働力確保や事業承継の支援、スマート農業の普及など、担い手のニーズが多様化・専門化しているため、TACには、地域農業のコーディネーターとして中核的な役割が期待されている」と訴えました。さらにJAグループ全体でTACを支援し、担い手の要望にスピード感を持って対応することが重要と指摘。「全農も農業者の所得向上に向けた取り組みを加速させていく」と呼びかけました。

来賓としてあいさつした農水省経営局の上田弘参事官は、JA自己改革について触れ、農協と組合員が向き合って今まで以上にコミュニケーションをとることが必要と指摘。「地域農業の担い手に出向き、課題を解決するTACの活動は組合員とのコミュニケーションの根幹」と述べ、TACの活動が自己改革の観点からも重要と訴えました。

JA全青協の水野喜徳会長も、「農業に寄り添うTACの力は、農業者にとってなくてはならないもの」とあいさつ。加えてTACは発足から10年以上がたつものの、まだ未設置のJAもあるため、「一つでも多くのJAがTACを設置してもらえることが、われわれ農業者には望ましいと思っている」と述べ、活動の拡大に期待しました。

基調講演は、元サッカー日本代表監督で、現在は愛媛県のFC今治のオーナーとして、サッカーを通じたチームづくりと地域振興に取り組む岡田武史さんが「サッカー振興とチームづくり～今治からの挑戦～」と題し、講演しました。

TACは2017年度末の実績で、全国2661JAの1788人が、約8万戸の担い手を訪問。約65万件の面談を行いました。大会ではTACのさらなる飛躍を目指して①多様化する担い手のニーズにJAグループの総合力で応えます②担い手とともに営農を通じて、地域の活性化に貢献します③担い手のために、日々進歩する農業の可能性に挑戦し続けます――とする「大会宣言」を採択しました。

参加者による分科会

参加者がテーマごとに6つの分科会で議論しました。

分科会①　TACの新規設置

担い手のニーズが多様化・専門化する中で、担い手の所得向上や地域活性化に取り組むTACの地域農業のコーディネーターとしての役割はますます重要となってきています。

新規設置を検討しているJAやTAC活動のレベルアップを図るJA の役職員を対象にTAC の優良活動JAと担い手によるパネル討論を実施しました。TAC活動の必要性や設置目的、活動の成果「TACに求めること、TAC活動に期待にすること等について それぞれの立場で意見交換を図り、今後のTAC の新規設置やTAC活動の拡充を呼びかけました。

分科会②　労働力支援

高齢化や後継者不足により、農業現場では労働力確保が大きな課題となっています。

労働力不足の現状を各種調査や情勢から再確認し、JAの取り組み事例（JAあいち中央の無料職業紹介事業）について研究しました。

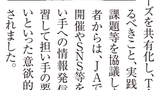
班別討議では、各JAの状況を共有し、労働力支援の様々な手法の中から、TACの役割について議論を行いました。今後、担い手の労働力ニーズの把握や、仕組みづくりのコーディネート役をTACが担っていきたいなど前向きな議論が行われました。

分科会③　人材育成支援

多くの農業法人や担い手にとって、社員や後継者の人材育成が課題となっています。

農業法人等における人材育成の現状やJAグループへの支援の期待について講演を受けました。

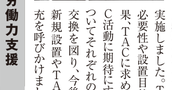
班別討議では、日々の訪問活動から掴んだ栽培技術やマーケティング、農業経営等多岐に渡る人材育成のニーズを共有化し、TACとしてやるべきこと、実践に当たっての課題等を議論しました。参加者からは、JAでの研修会の開催やSNS等を活用した担い手への情報発信、自身が学習して担い手の要請に応えたいといった意欲的な意見が出されました。



分科会④　農業資金支援

経営の規模拡大や設備投資などの担い手の資金ニーズが高まるなか、TACと担い手金融リーダーによる担い手支援策について検討しました。

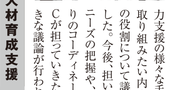
担い手の資金について迅速かつ継続的な対応を図るために、JAの優良取組事例を共有し、班ごとに、TAC金融リーダーの立場から、部門間連携をどう進めるか、部門間連携の課題やその実例、解決策等について議論しました。具体的な連携策として、TAC金融担当者の定期的な担い手への同行訪問の徹底や情報共有のための例会の実施、担い手の要望に基づいた金融商品の開発などが発表されました。



分科会⑤　事業承継支援

事業承継は、地域農業や農業経営の継続にとって喫緊の課題となっています。

担い手の事業承継の実際の経験談や具体例を学び、TAC活動の中で取り組む重要性を再認識しました。また事業承継のきっかけづくりのために、JA全農が作成した「事業承継ブック」を活用し、親子の話し合いを進めるロールプレイングを行いました。参加者からは、まずは親子の話し合いの場を設けることから始め、事業承継の実践につなげたいなどの意見が挙げられました。



分科会⑥　6次産業化

担い手の所得向上や地域活性化のため、新たな農産物加工品開発やブランドの確立、販路の拡大、直売所運営や観光農園等の6次産業化について、6次産業化プランナーも交えて、班ごとにテーマごとを決めて議論しました。

地域の特産品を活かした6次産業化の取り組み具体例や実現するうえでの課題の抽出、その解決策について議論を行い、高齢化地域での加工ビジネスの展開や規格外品を活用した体験型直売所の運営など、実践的なアイデアが出されました。

次の10年へ、さらなる飛躍を――。今年で11回目となるTACパワーアップ大会は、①担い手の声を反映した地域生産振興の実践②労働力支援や事業承継支援等の地域全体の課題解決③TAC活動の強化によるJAグループの総合力の発揮――をテーマとし、日々進歩する農業の可能性に挑戦することを誓う、活気あふれる大会となりました。